

クローンウシの安全宣言

Beef and milk from cloned declared safe

news050411-2/11 April 2005

Jessica Ebert

ただし、遺伝子工学の研究が生み出す食品に対する抵抗感は冷めやらぬ。



クローンウシの乳と肉の成分は自然に育てられた個体と変わらないことが、米国と日本の研究者たちによって報告された。

コネチカット大学のXiangzhong Yang たちは、過去に例を見ない極めて詳細な比較を実施し、100を超える項目の解析を行った。それでもなお、人間が実際にクローンウシからつくられた製品を口にしてよいものかという懸念は鎮まらないようだ。

「今回の研究でクローン個体を対象に調べた項目についてはすべて、肉および乳製品の、食用として承認される正常範囲内にありました」とYang は語っている。「クローン個体と対照集団との間に有意差は認められませんでした」。今回のこの研究結果は *Proceedings of the National Academy of Sciences* に掲載された¹。

Yang のチームは、ホルスタイン種の乳牛4頭のクローンから得た乳試料を対象に、タンパク質、脂肪、ラクトース含量などの、日常的に測定されている項目を調べた。その結果、クローン個体と対照群の乳に重大な差はなかった。また日本の有名な種牛である「神高福(カミタカフク)」の2頭のクローンの肉については、霜降りの入り具合や脂肪酸組成などの項目について業界基準の範

囲内にあった。

クローンの雄ウシの肉については、非クローン個体の肉とは霜降り具合や脂肪酸などの一部に違いがあったが、これは今回調査を行った研究者たちによれば予想の範囲内だったという。というのも、今回調べられたのは、元々が極めて高品質の特徴を有する優れたウシのクローンだったからだ。全体としては、検討項目の90%以上が非クローン個体と同等だとも述べられている。

問題はない？

米国科学アカデミーが2003年に実施したリスク評価では、クローン動物とその子孫に由来する製品には問題はないと報告された。しかし米食品医薬品局(FDA)は、このような製品の安全性に関していまだに判断を下していない。

今回の研究結果は、食品に対する消費者の安全・安心に役立つかもしれないと、ミズーリ大学コロンビア校の動物生化学者 Michael Roberts は語っている。「個人的には今回の論文が、遺伝的には何ら修飾されていない(遺伝子組み換えではない)クローン動物に由来する製品は、何だかんだいってもやはり一般の牛乳や牛肉と違うのではないかという消費者の懸念を払拭してほしいと考えています」

だが実際にそうになっているとは言いがたい。国際食品情報協議会(本部ワシントン)が昨年実施した調査によれば、米国の消費者の62%が、クローン動物に由来する製品は「ほとんど買わない」、または「どちらかといえば買わない」と回答した。

「一般の人々は、安全性と健全性および純粋性を同一視しがちです」と、全米消費者連盟食糧政策研究所(ワシントン)の所長 Carol Tucker Foreman は言う。大半の消費者は、将来はクローン動物から加工された食品を口にするようになるかもしれないという可能性に対して嫌悪感を抱くだろうと Foreman は考えている。

今回は比較的少数の個体しか調査できていないことを認める一方で、この調査が、クローン家畜を対象とする将来の幅広い研究の基礎となるだろうと Yang は語っている。今後さまざまなクローン個体を対象に同じような結果が得られれば、こういった食品の販売解禁を求める者たちには追い風となるのかもしれない。 ■

参考文献

1. Tian X. C., et al. *Proc. Natl Acad. Sci. USA*, **102**, 6940 - 6946 (2005).